

法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-07-01

琉球入貢紀畧

山崎、美成 / 鍋田、晶山

(発行年 / Year)

1850

琉球貢紀畧

完

210
22

琉球貢紀略

嘉永庚戌再雕 靜幽堂梓

琉球貢紀略序

卷之二

海外作風潮而朝貢於我者有琉球島、有朝鮮島、是琉球則以其為外朝、高相視萬一家、爾後或曠時間而自島津氏兵船一西以來、遂廢絳服、承為我之附庸、然後隨時入朝、備明禮典、莫敢廢弛者既二百有餘年、特歲不一為歲歉、余年已七十餘、幸親見其入貢者、而且六矣、注本嘗述其梗槩、作入貢紀略一卷、以

王祥今在庠成孟冬中山三復使至川平責方物
謝其龍封之恩於是余就前書補闕拾遺的
再刻之而山崎北岸為之校訂以備余老友
也博综今古最通國家之典故今以其將仍空
照而此書始成豈非余之幸耶度長間我與
岩城者釋岱中老嘗赴孫殊遙於駕璽船
以入唐山夷人憚之峻拒不允岱中因住孫殊
寺与榜紳馬幸明文善移居首至南桂林寺

為萬善慈濟神造祀以祀之立國廟未又做此
問道刻注來著殊殊注未以便臺家留未繙
住軍不全閏三年乃知唱坐岱中剪拂一席及凌
波濤踰絕險罔於孤寂海孤島之旁使徒仰
戴仰服不已祚德望之隆抑多可謂此

皇國之勝烈而致余生遭雅興一日不敢忘躬
度险而久中山儀典於輦轂咫尺不占衾
中固其應極而委其遠勞不為立章也而大

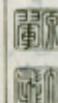
矣遂併称以鳴昇子之盛者如此

嘉永三年庚戌冬十月晶山老人時序七

十二題於木雜寫書屋



叔嚴原筆書



叔嚴原筆書

叔嚴原筆書

引用書目

日本書紀

中山傳信錄

琉球國志畧

崖州舊傳集

諸島踏譜

今類年代記

中原康富記

京都將軍家譜

齊藤親基日記

和漢合運

異國往來記

系圖

駿府政事錄

南浦文集

元寛日記

方言錄

輪池書錄

羅山文集

萬天日記

甘露叢

琉球聘使紀事

李保日記

歷史要畧

三國通覽

達水見聞私記

琉球談

南島志

惟靈集

今昔物譜

中山世譜

保元物譜

琉球奇譚

琉球神道記

琉球往來

琉球年代記

琉球雜誌

英林
英琳



里之子



琉球國王





琉球國越東三明堂樂水一百土藏書

琉球入貢紀畧同錄
琉球古の朝獻
右琉球と換歌島あらひハ多称焉と云
琉球使事外事
琉球の名載籍子スニスニ
琉球國薩摩北附庸ニキテ
永享以後琉球人本る
薩州大吉琉球と括代す

琉球の古護神靈駿
琉球の古護神靈駿

薩琉軍謀の辨

慶長以後入貢

附錄

琉球國全圖

三十六島圖

中山世系

鎮西八郡爲朝鬼父島へ演る

佐階北次革

增訂琉球入貢紀畧

琉球古の羽歎

琉球を唐邦北南海十あそ二つの一乃島國あり當國の風俗ととよを體朴みて文字子習らず、こまくもて國乃名ハ定る所と、用廻り歴代の事実ハ史書重とよどものもあづバ、それ詳あらずハ姑て考へべしす、唐土北書子を隋書子とし、あくニテ大ノ、楊鼎の大業元年海師何變とソムトウ春秋の入貢記畧

二月天氣晴朗て海上風がさやうあり財東北方向を見
候すが、此子煙霧の如く子石かられ氣あり、さの
事きこと幾千里とこもとてちよべくかにこころすよ
まき三年帝羽賜尉朱寛とソヤカのてとく海
外北異俗で訪ひ居ね一むす子あうて、何戀うにて
ソることのあれハ俱子つ連縫きなまふ、遂子琉球國
小島ノタルニモ、言語通セテ、あくま一人で接りて還
まア、その翌年再朱寛と琉球子つ久ハして、慰撫セ
一むす子とも接せざルハ、朱寛うの國子往く事

小布甲と云ふと還れり、其の後君邦此使小島
唐土子あり、彼布甲とそそり下す、五ハ夷都久
リモ久代用をもと、三の御とソアシテ、君邦子
ハ不うの事と記す。まる毛代モソト、ソドモ、二花
子ちて、傍ハ琉球の人は、狼狽島の人ととも小
鹿部へ至りて、往く事未一たまも知れず、史成
按する所、推古天皇二十四年小振政の事あると
云ふる、この年隋の大業十二年子あく少ひ、二月
より先子振政の今ミモ子琉球の人は、君邦本末

モーとあくべや町へん、あらざれハ大業の初、安
邦の人れ隋人子養へ一調子うるひぐく、少六琉
球ノ名ハ、史子あらさくはくども、すこさんまごう
主、やく己子被りより朝獻ありと知るべし。

按すよ推古天皇二十年、扶桑の日本より見
えく、史小振かずか御久益久、益久が御、益久車よしもん
り朝獻あらさくハ、乃時より始まるをらん、在扶桑く
ふも、而、琉球至ることありシソア、又天武天皇十
年、多称島なんじまへ使人てつぶて、その國みに圖ず貢こう、
附すと多称島なんじま、南島みなみじま

アキタキアキタキ
琉球使事りゅうきゅうしじれ

琉球を挾取いっしゆうの人ひとともす推古天皇の御宇ごよ
來きりタへたへば、やく朝貢あらさくありあへ、少くてそつ
附つきすと多称島なんじま、南島みなみじま

國と往來がなれど、久々に記載するえども、さる
縣聞曉度のまゝく、あるてあまハシの故あり
とおもふる、その國もあくまでも北島國である。づれ
の國は附庸あるまじく、通信をせきう。明の法
武年間琉球ハ察度王の附子あくまく、冊封にて唐
土主ノ中山王子封せられて彼等へも往來しく制
度文物す。唐土子あくまいてぞありたる明の宣
德七年、宣室内官紫山とつて臣五年にて勅
書と齎らしめ琉球國主つるや、中山王子あくま
人也。

て、要邦承眞信セリ。此の宣德七年も、要邦北永
事四年子あくまり、二年子あくまそ考カム。上古半
年もや、付東経えく。ほ嘗宣宗つらひ子我邦へ使
セ一ハ、多う子年と歴て再び要邦へ琉球使せられ
不始めあくまし。これより後も明の正統元年英宗流
球北貢使往是堅セリ。回勅と齎らし、日本國
王原義教子諭すとひ、永樂八年嘉靖三年琉球の
長吏今良のとて、日本國王子賀諭す。大承印事内
山傳信錄流、ごくもとあひ、乃つ付う要邦へ書と贈
珠國志畧、ごくもとあひ。中

琉球使小使ぢらるることもありしらべおもむきあり

琉球ハとどより豊邦の属島ありとども、かげ
ちあれるる島國ゆゑ、その國修業すとくもやく
絶ゆまじき。載籍子孫やるとのも、僅子一二
條のみあり、それ詳あること記すものあ
ふとぞ、弘法大師の性靈集小観風羽扇權府
耽羅之根心北氣夕發失膳面求之虎體とつて
文あり、これハ入唐大使賀能がうち子代を携え

予、福州觀察使子興アムニの書ゆく、延暦二十三年
年の辛子り、すく今昔物語、智證方師の傳子、
仁孝三年八月九日末の高人良暉、久年來居西
小あうて、宋子ノにあひて、され般舟乗り行
くよ、次の日辰戌時ちうりす、琉球國小漂着く、
それ國を海中すあくて人を食ふ國あり、その附
子風やうへ赴くん方を知らず、ちうり小陸のく
て見きハ數十比人津を捨て徘徊す、鉄良暉こ
れをみて泣悲しかねる故て向ひ立多シ子、差て

多くこの國人で食ふところあり悲しき事也
命て失て人子すと、和尙ニ在て安らぐ心を
て不動坐て念じたり、延喜ノ御代ノ撰ミーと云ア
ニルや琉球國の名要邦の書籍子見えづる故
うあらん、さて一ヲモ琉球ハ人と食ふは承く人
あてり、かとより傳説の訛り子。まゝその據と
ニテおきナアド、隋書小國人好相攻撃等、取
國死者共聚而食之とあるとおり人を唐土みて
ウタヒトヨリ、琉球ハ人で食ウタシが傳ヘ一と、多那

みをひき傳へ一かくし、一花子よりくもろの
國多那子ハを多那子とも絶て往來あるとぞ
知るべし。

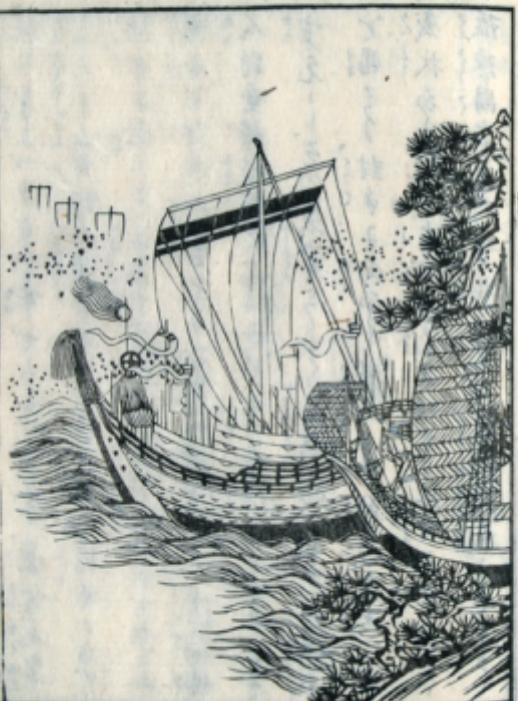
琉球國薩摩の附庸である

是利義満の男、大覺寺門跡義昭太僧正、延喜の企
てあり九州へ下りて多那子が、その事跡観
乃れハ日向國福島北永達寺子落下り、即武士の者
ごとく声教を隠れ傳ひたする足利義教元と
きに一石一つけらる薩摩の太守島津隆美ち志兵ヘ

あ井在易

えのふはまよ
うなづく
梅子

やめ貢を
ひきわ
あえ
セー



討ちをまづべきより、布ぢらも一ノモ、嘉吉元年
三月十三日、揖山衆子あゆこ此兵士と徑そしやて
封手小向もを承徳ちゆうに、山田式部とひよの
傳臣と討ち、御首ともお軍へ贈りタノ傳臣の役
人別垂讚岐坊とひよのもの、う附討までうきき
せえー、その恩賜うつく、薩摩北太也へ琉球お
て賜ちう討手子向ひ、揖山との外の兵士へも
威状あらひ子を刀で下されう、此付よりくく
琉球國年毎乃貢物と云ふに通信交易してかく

薩摩北附庸とあるの様なりあり、舊傳集、諸

永享以後琉球人奉る

文安五年琉球人ある、分類年
代記

寶徳三年七月琉球北高人の船、兵庫北津子島岸
あらむるす、す護職細川承兆やかく人とつらましく
彼商物と携くるより料是と云ふ事、先年この借財
四五千貫小及て、そ返辦あくそ北上賣物と云ふ
取られて、琉球人難美のよしやーなま、八時の公方
より、奉行三人布施下野古飯屋興三左衛門、同六郎

とつゞされど、亂明チヨミーよりの押ハシメテす
物モノを京兆カイタウより返されスルよりて、まわりの上層延
引ハシメテ、東富ヒムラ

文正元年七月二十八日、琉球人參渡す、ニルハ是
利義政の世子ありヨシマサ、度目ドウモトアリ、齊麻親
至アリ、天正十一年、琉球臣入貢リュウキュウジンノウコン、和漢合運ワカンガブン、異

國往來記

按アリすよ、寶曆三年、兵庫ヒガタ十石ドツ琉球の高タカシマ先
先年チヨミー化借財カクザイといひマシて文正元年の參渡シヤウドウ及
時ハシメテある小コトハシメテおりへど、承事シヨウジ以後ヒヨウは國人

の奉ハシメテて、あむくアムクあいとアメめきメキとも、記載ハシメテ
一タモタモ、そり詳ハシメテあることをハシメテ考ハシメテへハシメテ
薩ハシメテ川左守島津氏ハシメテ琉球リュウキュウで征伐ハシメテす

琉球國ハシメテ、嘉吉年間足利義教の命ハシメテてすハシメテ、
雄ハシメテ割據ハシメテの時ハシメテ子ハシメテありて、琉球リュウキュウの侵ハシメテ来ハシメテ、
之ハシメテ世ハシメテ薩ハシメテの附庸ハシメテ國ハシメテとハシメテろ、天正の近ハシメテ草
野ハシメテの家ハシメテ久ハシメテ、琉球リュウキュウへ使ハシメテつハシメテて、そこハシメテの如ハシメテ
貢使ハシメテあハシメテきハシメテ再三ハシメテ乃ハシメテども、彼國ハシメテの三司

官謝那とよお者ひそく不図今と車と譲り給遇と
 まろと神あく貢あもせりタレハ、かわ家久使ひる
 そー、貴き臣とぞと後ハテタムトモよりて止ニ
 てぬす征伐ノミツの罪と云えんと傳ふ子慶長十
 二年正月、左京と蒙ノ、岸川權左衛門久高と初大
 池ノ、平田左衛門左湯つ益宗と副將ニ、龍雪加尚
 と軍師ニ、七島郡司と案内者とし、その勢都
 宮三千餘人、軍船百餘艘と候。二月二十二日纏
 て解て疏陳をへ發向する小のとこそ、おりて出陣の

程ひよりて威刑一々あらず世トテえうる勇士乃
 めうらう。新納武藏古一氏老母入居ノミテ抜高と取
 パ持者とおせら化、祇園の洲とよどみとろくまく元
 遊ノ、諸軍勢ある居る。岸川權山久高上主子居れ
 ず、蘇退チラリテ、新納抜高ナサレ。かく、今疏陳
 征伐の方抑として、倭海ある。而ニれ君の名代
 あり、やく太ねの世子ありけりといふ事
 あり上すふつれ多うされ。諸軍の士卒も自ら
 一號令行かれうとや夫より棄城し、山川の

後より頃風子既てあり大島小島岸へこの多人民
防き戦ひたりよりて砲砲をうちかけ防ぐりの
おりそ千人ちうて向か者こもハ村秀と、首く獲る
と三百餘級化ハ三分降人ふそ出子を。四月朔日
沖の永良部と興論島を攻め、運天に渡る事
つけ、船を三艘へ城を攻め、首里の玉城をえ
りもんとおもそ一里あつてある那霸の傍
手ぶらむきを不渡の口を逆茂木孔机すき同
じく、水中子ハ城の頭を擧げ、二主の船のうがハ
さうひ手負討死も手きよひあらねど、祈くらむハ
す直不進して首里子攻入玉城をうち圍み多
手、さうふく琉球の諸勢と那霸の渡る城子と
て籠り玉城ハ寺勢もく防き戦ふつき兵士も存
する。きわひ子中山玉城三司官本あらへて敵す

るてあらず、遊易（よき）。まことに津參子出で、薩城子及のタリ。那霸の城子ハ矢尾（やお）で、三人祐と、そと、敵船一艘も見えず。バハソシトカカフニテ、不素小艇（ふそ こてい）あり。押（おさ）すま玉誠（たま じまこと）もやく巴子薩城と、沈えタルハ一戦（せん）かと及ばず。薩城す、タリハ、建子軍北勝利（ほくしり）と、琉球名小平均（こまん ひんぐん）。ハ札（さつ）ハ早船残以、召軍家（めいぐわ）へ往をあり。うち甚称美せさせ。故ひタリ、タリ。その年八月風の時御子おれタリ。故子諸勢琉球小浦（こしうら）。望三年五月二十九日中山主

尚寧（じょうねい）と在。ハ軍士観陣す。同八月薩城の大雪中山主をうるあひ。騎脇（けふく）不ありて登城す。時子中山至段子百端理（ほさんり）。皮十二君（じゅうにぐん）。太平布二百疋。白銀一万兩。大刀一腰（いつよ）。と獻上す。ハ在ハ。冲代（うとう）始（はじ）。子美國。御手子入（いり）。とて。此外小冲威懾（おのなめ）され。宝業（ぼぎょう）。とて。沖櫓（おきや）。あざい。子琉球。少て賜す。多。中山主。も拜領物あり。花柱（はなばし）琉球。あづく薩城の附庸（ふくう）。と。あり。子。多。多。と。名。と。も。と。ノ。江戸。小至。子。招軍。家。と。謁。多。多。小。米。千俵。と。多。多。多。多。年。

國あり。是年中山王も奉國子歿すとぞなり。浦大魚等子撰記十
朔と奉じ聘禮で修して今化入貢の旅を子ノ二の後
將軍宣下焉君孫沖誕生五歳彼臣中山王總目の
交每岁必貢使來く周主と奉し。

慶長十四年琉球征伐ノ時西不見の國ノ中
子とあく容顏美麗ある昌幸あらは婦人のハ
奇子棄置さり大野岸山氏舟子棄り移り
て之るやう我を琉球國の主護辨才天女あ

ニの次征伐あらざる、ながら二三ハ月の人民
を殺一國を憚り止めてあれどあらざ我案内
て達る琉球王を庶子属一ヤすトシシヒ待
里を定ム。而して又バツのまゝ本儀乃辨才
天あり、さて乗ノ事リ。舟と見えども、簾乃
候ありタク、神聖のいちあらく、國を護イシム
の厚きと感し、舟中子安坐し、後陣の舟事れ
よ。とテ立々池の中ある島子祠を建て、そ
きに祭り立たれり、舊傳

因子云世子慶流軍談と云ふ歴史ありの書也
撰者詳らずと云ふ事あらずく流布一卷
國に我争どりふるのハ事らば口實とす、そろ
ひやところ、薩摩乃左衛門島津兵庫院義弘の代
小綱大内新納武藏守一氏、その外様島大膳佐
野率刀等、士卒衆人數十萬千八百五十人に
渡海セ、又うの國に、鹿屋城竹虎城雪
ひへ來、倉島乱蛇浦あと、よし地名あり、それ故士
兵、陳文頃盡龜靈朱傳說張助昧の名にて
有

一九、震子あくろこちふきを安寝下して至の書此
手稿端と存へてあふ。

慶長以後入貢

寛永十一年四月九日、中山王高聖賀慶使佐敷
王子因謝使金武王子おとづれ、方物を貢す、元寛
永九年羽軍家即上洛ありて、京都子す、まことに
て二條の御城へ登城す、これや冬子二使は戸小東
ラす、

正保元年六月二十日中山王高賢賀慶使金武按

紫湖星移何朝威萬里東來
貢獻特異榮華堂仰尤齊爾天
五福見漢官儀
九州百變興刑空繞島猶能
見古風龍結碧牘並隨俗先
王鼓樂在其中

抗山大潤等



中山王在



美林題畫

司恩謝使國頭按司ホドーく方物を貢す七月三日

不跡毛日光山社神宮を拜す輪池

掌錄

慶安二年九月中山王尚贊恩謝使吳志川按司等
トモ方物を貢す、琉球事略毛日光山の神宮残拜

す、

承應二年九月平日中山王尚贊賀慶使國頭按
司ホドーく方物を貢す、羅山文集和漢合璧、毛日光

山社神宮を拜す、甘露書

寛文十一年七月二十日中山王尚贊恩謝使全武
トモ方物を貢す、琉球聘使紀事毛日光山の神宮

宮を拜す、琉球事畧毛天子毛日光山の神宮

替代備考

天和二年四月十一日中山王尚贊賀慶使名護按

司恩謝使國頭按司ホドーく方物を貢す、甘露書毛天子

寶永七年十一月十八日中山王尚贊賀慶使美里王

子富盛親方恩謝使豐見城王子與座親方ホドーく

方物を貢す、琉球聘使紀事毛東嶽山社神宮を拜す中

山使の日光山を参す、琉球聘使紀事毛東嶽山小木石と

ニ北時て始らる、

正徳四年十二月二日中山王尚敬賀慶使與那城王子恩謝使金武王子等とて、方物を貢す、文露

享保三年十一月十三日中山王尚敬賀慶使越來

王子西平親方ホーキー方物を貢す、享保

寛延元年十二月十五日中山王尚敬賀慶使具志

川王子與那原親方ホーキー方物を貢す、歴史

寶曆二年十二月十五日中山王尚穆恩謝使今嶌

ノモトウイ王子ホーキー方物を貢す、歴史

明和元年十一月中山王尚穆賀慶使讀谷山王子

イモトウイ王子ホーキー方物を貢す、要畧

おでーく方物を貢す、三國通覽

速本私記

寛政二年十二月二日中山王尚穆賀慶使宜所
臺灣

王子おでーく方物を貢す、琉球

寛政八年十二月六日中山王尚成恩賜使大宜見

王子安村親方ホーキー方物を貢す、輪池

掌錄

文化三年十一月二十三日中山王尚觀恩謝使讀谷

山王子小禄親方ホーキー方物を貢す、

天保三年十一月中山王尚育恩謝使豐見城王子

淳岐親方ホーキー方物を貢す、

天保十三年十一月中山王尚育賀慶使浦添王子

慶喜味親方おでこて方物を貢す

嘉永三年十一月中山王尚泰恩謝使玄川王子孫

村親方おでこて方物を貢す

附錄

琉球國全圖

琉球國小三省あり、中山も、中頭省、山南八島省、
山北も、小頭省あり、此屬省す、又三十ハ二れと
同切と云ふ、同切とハ城下といふ如一、その同切此
等の、あるひち郡縣でさて之れ、その領主てかの
領主てかの、按司ども、三十ハ二れと云ふ如一、鬼
島也、十二の島あり、那二れと五島七島と云う、こ
までれ島くみ産する三三三の物ハ、蕃粟、草薙、芭
蕉、五色魚螺、魚鱗、渭海參、石芝、小三十種々飾ふ、

琉球國圖



七

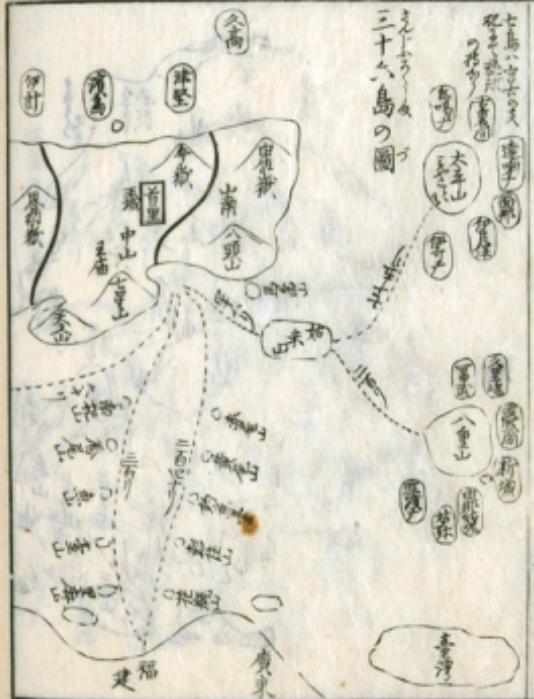
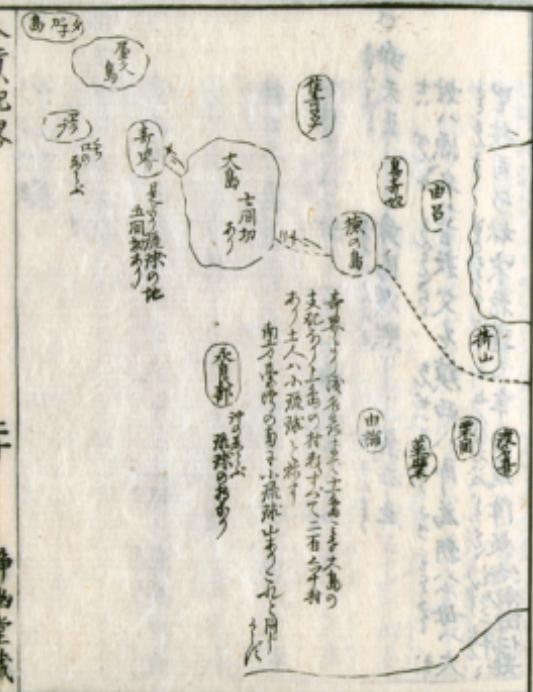
卷之三

This is a traditional Japanese ink wash map (suiboku-e) of Mount Fuji and its surroundings. The central feature is Mount Fuji, depicted as a large, rounded mountain with a dark, textured base. To the left of the main peak is a smaller, more rugged mountain labeled '運天山' (Unzenzan). Below the main peak, several smaller peaks are labeled '今歸山' (Imayamana), '苔山' (Kōzan), and '香山' (Kōzan). To the right of the main peak, there are labels for '芝生山' (Shibosan), '治山' (Tishan), '美利' (Meri), '金武' (Kinnō), '志' (Shi), '志' (Shi), '羽地' (Hidai), '所來' (Sokurai), and '御殿' (Gōten). The map also features several labels at the top: 'あう' (Aou), 'あう' (Aou), 'あう' (Aou), '御殿' (Gōten), 'あう' (Aou), and 'あう' (Aou). The style uses fine ink outlines and light washes to represent the terrain and vegetation.

卷之二

七

卷之二



天孫氏廿五紀

中
山
世
系

宋の淳熙年間天孫氏二十五紀の裔孫猿徹
至化医利勇機（めいりゆうき）てまわして仕て李小鷹（りしょうおう）を輔拂
かすを乞うて起一利勇（りゆう）て討つ國人を救

と推て位小就く、されど神天王と云

舜天王

卷之六

義存五

姓八源名公至教父也鎮西人即為朝公母八大里按用少林宋元道二年丙戌降封六衛僧仁號

元年于淳熙十四年丁未御位嘉熙元年一月薨
在位五十一年壽七十二歲。子以又、義寧、
量名神早、信、在位十一年。歲五十而崩。
祖子諭、一、田、今汝政子秉。六、年聖小民泰
人宜、大統。承けづき、民比父母。うか
てとくま、固く持。一、ルれ、こよ羣臣。三子共
小勤、も、信不即。一、も、義寧位。擧るの極至
強も、ころて。かくす。校子考妣。傳そくす。今
考ふべく。一、萬朝空北。血統。舜天王。一、義寧。惠
三代。考。一、母也。三子也。七十三年。

英祖王

美祖を、天孫氏の裔惠祖比孫

美慈王

大成王

西威王

王城王

武寧王

察度王

尚巴志王

尚忠王

尚思遠王

尚金福王

尚泰久王

尚忠王

尚德王

神号八幡按司又世高王と称す、則の西徳王
年辛酉降誕義教將軍嘉吉在位九年壬午
九時子世子幼々王人少ニ至
キ武一府領官金也即位一月而王て君と
これより中山萬世王統の基と用ぐくシテ、尚思
王六十四年

尚武王

尚德王

尚泰久王

尚稷王

尚德王
尚稷王
尚泰久王
尚思王

高國王

童名東穂名ハ金丸、明々永樂十三年乙未降
誠守の儀装うて龍鳳比翼あり人あらびよ是
下小唐あり色金の如いまく佳子即ちる乃
は泊村の人安里くよふ者「さひ乃く」在人八倭
兆に上子居る「きの徳アアトソア人明の成化
聖年九月一九日薨在位七年壽五十七歲
十二年七月二十八日薨在位七年壽五十七歲

高童威王

尚潔王

尚真王
尚元王

尚永王

尚寧王

童名東穂明の嘉靖四十三年甲子降諱万
曆十七年卯位同四十八年九月十九日薨在位
三十三年考立十七歲度長十五年入貢す

尚豐王

尚質王

尚純王

尚敬王

尚撫王

尚益王

尚貞王

尚成王

尚春王

尚顯王

右中山世系北畧あり、これを疏説尚貞王の附
尚弘徳とるの子命とて撫するところれ、中山
世譜小摺りて記す三ろある。

鎮西八郡為朝

鎮西八郡為朝伊豆北島子流され一ノ永万瓦年
三月白鷗の沖の方へ飛移りて乃く定めて島を
あらんとて舟を乘りて馳せ移り小あら島小

島々をぎりりす、田もか一島也す、汝等何
ぞ食車とするく同くも魚もこづふ、その鳥ハ鷗
やくも、馬胡ニモて見ゆひく、大福ワ矢少て木
子あるて射落し空で翔るて射殺しキトノハ心
高のそれごも舌てかひておち居るは本も我子
候もだハがくめ如く射殺さんと言へども平伏
て寝ひタリ、島れ名て同大名ハ鬼ヶ島ト申ヘ、保
物語二の為朝北渡リ鬼ヶ島とテハ、而今ア瀬
殊語りとあく、くて國人との武勇不ふるを服致、

ひ子大里按司の妹不穂具一と舞天王をもが爲
朝この事小うあると日名一く故土をおもふと
禁ごくく一くひ子日牟子ゆく、琉球
やまと
事略

不ぐくとも、ひ子日亭子ゆうり、琉球
按すよし、今已小琉球の東北子あくらも、鬼界島
とよ名のあむも、その名残あくとよ。

位階の次第

官位の品級、正授にて九等あり

元侯 正一品、
正二品、

元候 正一品、清司 正二品、榮中上官 檢二位、
元也 三司員と様一、あいへ候る地此
總方と候ふものと聞て、正二品、榮中上官
耳目今又浙預御と詔、謹者又申口共賛議官正四品

那霸官、赤毛巴地名、案佐紀官、檜田佐紀官、雷中官、恆
勢頭官、親雲上佐、撫牌金、恆七、里之子、云八

里之子佐佐選八八九九、篤登之之佐佐選九九

此皆大夫、正議大夫、長吏、都通事、度支官、主簿等。

九引首、内官、毛習、内厨、重书院、良醫寮、善院、
祝長、年譜人、武幸。

里の子も小姓あり、美サ年セテ、ふ年セテ、
八親王上とある。親王上、官名あり、とも被事の風俗やう、
武士てすゞく親王上と云う。

嘉永三年庚戌十一月

體膚經辭

